

# すっかんぽ

1995年 2月号

## 春を待つ

そのII  
アブラコウモリ

## 生き物たち



「先生、コウモリ……」 放送部のUとIの差いたすクッキーの箱の中には、ほこりまみれの1匹のコウモリがうすくまっていた。

2月16日の放課後のことだが、Uがろう下。窓をあけようとしたら、サッシの溝にいたコウモリをひいてしまったらしい。特に外傷は見あたらないが、何となく、「こりゃ、もうだめ」という奪囲気だった。クッキーのあき箱というのも、妙に哀感を漂わせていた。

「あしたまで、もたないかもね」「死んだ時は私が埋めますから標本にしないで下さい。」このコウモリに、もはや明日はないようだった。

しかし、このまま放っておくわけにもいかなないので、今日は家に持ち帰ることにした。外はもう、うす暗くなっていた。コウモリは箱ごと、助手席においておいたが、最初がサカカサという音がきこえ、動く気配が感じられた。ところが、しばらくすると、動きが激しくなってきた。ガサガサ、という音が、助手席の闇の空間に響いてきた。

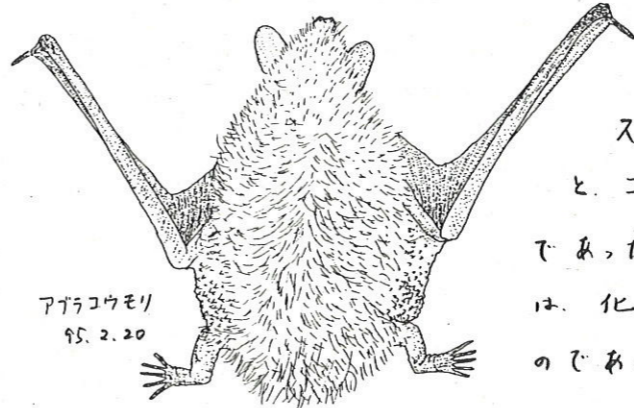
「え、死にそうなのよに……」音は、さらに激しさを増し、そのうちキーキーと超音波のような鳴き声も混じってきた。

飛ぶ飛ぶ箱をあけてみると、コウモリ君は絶好調で、股もふり回し、小さな鋭い歯が、びりびり生えている口を開けて威嚇してきたのであった。「生き返った！」別に死んでいたわけではなかったが、静と動のあまりの落差の大きさに、思わずそんな言葉を口に出していた。

家で娘の美緒にみせると、「あ！あ！」と指をさしながら、びっくりしているようだった。その夜、美緒はコウモリの超音波と子守歌にねむったことだろう。コウモリは、まさしく夜行性なのであった。次の日、再び学校にもっていくことにした。

調べてみると、このコウモリは、アブラコウモリ（イエコウモリ）という、住宅地などで最もふつうに観察できる種であることがわかった。神社や寺、古い民家の屋根うらなどを棲み家とし、夕方と明け方に活動をしている。飛び方は、ヒラリ、ヒラリと急旋回したりするので、鳥と区別することができる。口や鼻から超音波を出し、それを頼りに飛行し、羽の膜は、昆虫を捕らえる際の網の役割をはたしているようだ。冬の間は活動がにがり、冬眠する場合もあるそうだが、このコウモリ君、なぜか小山西高まで飛んできてしまったようだ。

そこで、20日の放課後、夕方にはなれば勝手に家に帰るだろうと、外にだておくことにした。しかし、パタパタと羽を動かすだけで、うまく飛べないことがわかった。こうなったら、ここで飼うしか方法はないが、一番の問題は、「エサをどうするか」である。コウモリは、本来、生きている昆虫を食べているが、この時期、そう簡単にはつかまらない。



アブラコウモリ 95.2.20

しかし、この問題をあけなく解決したのは、K先生だった。玉子の黄味をスポイトに入れ、コウモリの口もとに近づけると、コウモリは口を大きく開けて、食べ始めたのであった。かくして、学校に迷いこんだコウモリ君は、化学準備室で春を迎えることになったのである。